

大正五年

(二月)

一月一日 土曜 とり 雨。

朝五時起。天地神明に礼拝、仏前に拝して、七時半、作法室にて淑(椒)酒雑煮を祝ふ。予、李子をはじめ十二人、男子木村壺人のみ、家内一同無事めて度き年を迎へたり。予の住宅、漸賀客を迎ふるに至る。朝、泰、寿子、弘、靖子、早苗来り、淑(椒)酒雑煮を祝ふ。

大東氏、清水連郎、手柄氏、長尾氏。

一月二日 日曜 いぬ 細雨。

朝、作法室にて雑煮を祝ふ。如昨賀客。酒井忠克、戸谷氏、橋本静水、関直博(博直)。祝酒を出す。

一月三日 月曜 む 晴。

朝の御雑煮、昨の如し。写真師檀上を呼て、新築玄関にて一同撮影ス。午下早々、年礼に出懸ル。始、閑院宮に参り、御息所に拝謁、御祝酒戴て、岩倉具綱、黒田侯、三井守之介、宮島、竹田宮、北白川宮 御祝酒給りたり、東宮御所、華頂宮、東伏見宮に参り、衆議院官舎 島田三郎氏を訪て、御夫婦にも逢て帰。晡時也。太田照代、貞世、範三。車夫銀え祝義、五(十錢)。車夫え同、五(十錢)。

一月四日 火曜 ね 晴。

葉室伯、五島万千代、春子、久米八千代、恭宮、茂宮、浜の(野)艶、正子、靖子、堀田伯、其外数人。
氷川神社え二十(錢)。

一月五日 水曜 うし 晴。

宇都美久子、松山、鎌田氏、中井鏡、跡見玉枝、北沢。車夫え昼飯、三十(錢)。浜野え二(十)五(錢)。

一月六日 木曜 とら 晴。○度以下六度、寒甚し。

朝十時より、姉小路、石山基陽、角田、玉枝え行。此処発会日にて、宝珠之試筆をすると云。予も玉を二枚揮毫して、秋元、戸田、西村、さゝ木、田村氏え。帰り、新田え行、日暮帰。

一月七日 金曜 う 晴。

午下早々、大谷伯二行。素謡初会ニ付、徳川家達公を始め、廿余人計、素謡六番、囃子七番、後福引面白く、十一時畢而帰。

平岡三人より、三(円)。別府より、五(円)。絹や、古払、一(円)四(十錢)。小包代、廿八(錢)。

一月八日 土曜 たつ 晴。

朝九時、職員生徒参集。式場にて君か代奏楽、校長勅語拝読、主事演舌、長尾氏衛生之講演。畢而運動場にて福引如例。五十人ツ、六百人福引。畢而一同退散。職員昼食を出す。村井宇野子死去ニ付、我校え金五百円寄附申来る。

一月九日 日曜 み 晴。夜雨。

朝九時半、出門。浅草本願寺にて、村井宇野子葬儀ニ会葬ス。此送り人大勢、本堂立錫の地もなき迄也。焼香して帰。帰途、本所福田氏を問ふ。芳子母死去ニ付、悔二行。初七日にて焼香して帰。日晡、予、李子と、井深氏移転ニ付、行て見る。此時、雨降。福田氏え香料、二(円)五(十錢)。

一月十日 月曜 うま 晴。

本日より授業を始める。来客、戸田極子。弘、来而晩食を致して帰。雨宮、浜松え出立す。閑院宮より御電話にて、十六日三条資君様え御出ニ付、御誘引被遊る。

小包、岡山津田、みの(美濃)土岐森本豊え。

弘え餞別、五(円)。雨宮え餞別、二(円)。

一月十一日 火曜 ひつじ 晴。

朝より火曜稽古始をなす。来客、下瀬夫婦、久野ツネ、桜井茂三郎。

一月十二日 水曜 さる 陰。午後一時、偕行社愛国婦人会、会費一円。

課業例の如し。午下早々、大隈首相を伺ひて偕行社二行。総裁殿下成らせられ、一同御礼申上。余興、薩摩琵琶、弁内侍、白鶴三方、めて度演舌アリて、殿下還行(幸)。跡にて一同食事、退散。三井得右衛門氏を問て帰。

愛国婦人会費、一(円)。

一月十三日 木曜 とり 晴。午後五時半、赤阪八百勘え、桜井、大塚結婚式。

課業例の如し。午下二時より、予、李子と黒田侯二行。御夫婦様ニ拝謁して御祝酒を戴て、九条家え行、恵子様ニ御目にかゝりて、八百勘え行。座定りて聯隊長金谷氏、仙台聯隊長

獅子刈氏、岡田実得氏其外にて、新郎新婦、媒酌人新山氏にて盛会也。十一時、自動車にて帰。

一月十四日 金曜 いぬ 晴。

朝、大塚、桜井両親父、昨日之御札ニ来る。金曜日稽古始にて、一大合作出来たり。

一月十五日 土曜 ゐ 晴。

課業例の如し。李子、年始廻り、朝よりいたす。予、午下早々、墓参して帰。来客、久の(野)冬扇氏。神戸早川え返書。

一月十六日 日曜 ね 晴。 安藤家、三条家行。

閑院宮御息所、御約束ありて、午下一時より小松宮侯え御年始申上て、安堂(藤)家に参る。御息所成らせられて、御相伴御祝酒お合のもの戴て、三時御培(陪)乗申上て、三条資君様ニ御共(供)申上、久々にて御悦、水入らすの御間柄にて、何くれと御咄申上候。御晚餐をもいたゝき、大饗応に預り、八時過帰。

一月十七日 月曜 うし 晴。

課業例の如し。来客、石山吉子、大炊晨子。新築をみせて、夕餐を供(共)にして帰る。

一月十八日 火曜 とら 晴。

研究生、稽古する。来客、石井まよ、たよ。

一月十九日 水曜 う 晴。

課業例の如し。道具類はこぶ。雨宮、大坂より帰。来客、万里伯、久野ツネ。廿二日泉会発会ニ付、金曜稽古断出す。

一月二十日 木曜 たつ 晴。 新築移転ス。海事協会初会。上野精養軒行、加茂氏。

朝より家具一切徙ひ付ル。鬧かしさいはん方なし。課業例の如し。

一月二十一日 金曜 み 晴。

金曜稽古休む。明日の準備にいそかし。夜も福引に忙殺。有志者より銘仙座蒲団三十枚、桑の衝立寄付せらる。

一月二十二日 土曜 うま 晴 暖如三月。

新築開。泉会執行。午下一時より続々来集ス。二階と下座にて、李子、開会之事柄を演舌す。庭の舞台ニ生徒之工案にて、七福神のカソウ(仮装)にて居并ひ、此七福神にちな

みたる福引を行ふ。大喜悦。四時頃、福引畢る。寄宿舎十三、十四号、食堂として案内、御折詰、口取、おすし、淑(椒)酒、ナマス、数の子、ゴマメ、あつ物、御雑煮にて賑々敷、食事済て退散、八時也。先々本年の発会も殊の外好都合、めてたしく。来会者九十人。明日の福引に大いそかし。夜十二時迄。泉会え寄附、十(円)。

一月二十三日 日曜 ひつじ 晴。七十七度。

朝より職員一同、新築開きに付、準備する。西川洋食飾り付ル。男客ハ洋館、女客ハ二階にて、二ヶ所にて午餐会。十二時、一同来集する。二時過、食事畢る。下座敷にて余興。竹本清宝の義太夫、梅忠と。朝貌日記ニ皆々なかされたり。後、福引大興ニ入りて、晡時盛会にて済。

一月二十四日 月曜 さる 陰。午前より雨。

課業例の如し。午下も。朝より庭の舞台かた付させる。洋館も飾り付る。

一月二十五日 火曜 とり 晴。

校外生稽古日、昼迄。来客、大坂高原慶三、此人ハ木津大樽サイと申人の孫にて、此度祖父母八十一、八十の夫婦、天杯を戴たるに付、帛紗、扇子など持来りて種々咄したり。予、李子和元巢鴨え参礼に行て、夜八時過帰。

一月二十六日 水曜 いぬ 晴。

課業例の如し。昼早々、河田氏え行。姉小路を問ていまた妨(分)婉なく、石山氏もまたの様子也。裏松千代子を訪て暫時咄して、閑院宮え参る。皆様小田原え成らせられて御留守中にて、みきと種々咄して退る。村井氏を問ふて、孝子、千代子と悔み咄しにて、夜に入て帰。田辺栄子、昨廿五日死去の訃音あり。

一月二十七日 木曜 ゐ 晴。

課業例の如し。李子、横浜田辺氏え悔二行。来客、石川菊。

一月二十八日 金曜 ね 晴。本日、陛下葉山え御発輦在らせられる。泰、中野え移転日。

朝、稽古済て、午下早々、大炊氏二行。家政様御在宅、石山師前様もみな御在宅にて、久々故ゆるくとして、車を帰し、夕餐を呼れて帰。八時比。

一月二十九日 土曜 うし 晴。

課業例の如し。李子、年礼廻りに行。来客、勸修寺伯、葉室伯、御子さま二人、中村良子。泊り客あり。

一月三十日 日曜 とら 晴。

朝より揮毫する。来客、丹羽花子。

一月三十一日 月曜 う 晴。

課業例の如し。三日来客之招待状出ス。一月も多忙中に相濟たり。

(二月)

二月一日 火曜 たつ 晴。

朝の研究生稽古する。午下、予、李子と三越に買物に行て帰。

二月二日 水曜 み 晴。

課業例の如し。川田行休む。朝より三越職人来りて、術(衝)立の直しする。種々準備に大いそかし。

大坂中島え、神戸早川え、京都高倉、山形県神林、岐阜水野え、磐城武藤え書を寄す。九条中島、香料、三(円)。

二月三日 木曜 うま 晴。暖。

課業例の如し。家内来客之準備と、のひて、午下四時に来客集る。余興に清宝の義太夫ありて、坪(壺)坂、三勝半七と二段ありて、想(惣)客大めに悦れたり。食堂、洋館男客、下座敷婦人席として、晚餐大めに盛也。八時畢。一同、九時帰。万里伯、智子、葉室伯、裏松千代子、久米、大炊夫婦、石山吉子、石山基陽、新田菊、姉伯、角田、清水二人、泰、正子、内二人、十八人之客也。

二月四日 金曜 ひつじ 晴、風。

朝より校外生稽古する、昼迄。節分豆まきする。

二月五日 土曜 さる 陰。

課業例の如し。李子、横浜え年礼に行。靖子、始て中野え帰る。来客、家庭の友記者、林氏細君、村井吉衛、其男と。石山基陽氏より一昨三日書面にて、此方に晚餐中、女子分婉、兩人共健全のよし申し来る。久米氏より御礼の書状。

乃木伯銅像寄附、五(円)。

二月六日 日曜 とり 雨。
課業例の如し。

二月七日 月曜 いぬ 雨、雪。 万里小路行。

本日より試験の画にかゝる。朝より雨、暫時にして雪積事一寸二部(分)。午下四時より、予、李子と芝万里伯へ行。夜の茶事。相客、予、裏松、李子、富(宇)喜多詰。広間之席にて、始会席、次中立して、濃茶、すへてよくとゝのひ面白く、九時、済て帰。

二月八日 火曜 む 晴。暖気。 精養軒行、別府氏結婚。

朝より火曜の稽古日にて、昼迄授業す。来客、安井久子、中村良子、箆箭寄附之使ニ来る。予、五時より精養軒に行、別府数子、山崎氏の結婚披露会ニ出席す。八時過帰。此時、夕立雨。

二月九日 水曜 ね 晴。

課業例の如し。午下早々、河田氏へ行。赤城石山へ行、誕生の児をみる。頗るよき御子、壮健にて嬉し。それより姉小路へ行。延子さま産氣附かれたる様子、どうか男子をとおもひたる。已而帰。此朝、別府徳子、御礼に来る。

二月十日 木曜 うし 晴。

課業例の如し。来客、別府の親戚の人 浅草紙屋の妻を連れて入学を頼に、万里伯、門野玉、正子も。姉小路、今朝二時男子出産。

二月十一日 金曜 とら 晴。

朝より揮毫ものす。来客、井上みね、其父と、又研究之稽古願に来る。

二月十二日 土曜 う 晴。

呉市高橋草平、越後山宮半四郎、群馬後藤善十郎、小包共返却。藤井玉枝、書をよす。上海津田より。

二月十三日 日曜 たつ 晴。

朝、田中久子、久々にて来る。午後早々、予、雨宮連て中野へ行。新築ホ、出来、未だ離れ座敷ハ中々の事、すへて勝手よく出来たり。李子、久米え年礼に行。打合せする筈、四時過、漸来りて、よめななと籠に満て摘む。五時過帰。

二月十四日 月曜 み 晴、后曇。雨、雪になる。四十八(度)。
課業例の如し。寒気甚し。愈寒さを覚ゆる。

二月十五日 火曜 うま 晴。
朝、研究生授業ス。午下、墓参して帰。

二月十六日 水曜 ひつじ 晴。
課業如例。午早々、河田氏へ行。帰途、姉小路へ行。御出産の男児を見る。御丈夫らしく、先々男子にて大安心。名命(命名) 良子様よりと、公英(ヒデ)。書をよす。大坂今西、橋場小松様幸え。

二月十七日 木曜 さる 晴。寒甚。
課業例の如し。来客、下瀬氏。

二月十八日 金曜 とり 晴。
研究稽古する。

二月十九日 土曜 いぬ 晴。
課業例の如し。午下早々、浅草婦人会に参る。此日、村井宇乃子の読経ありて、後説教二座ありて、四時済。直ニ観世音え参詣して帰。李子より、かい巻の奇麗なるを新調してくれたれハ、実温かく、こゝちよく臥したり。

婦人会本年分、三(円)六十(銭)。観世音え御初ほ、五〇(銭)。楊枝、五〇(銭)。徳厚会え一(円)廿(銭)。

二月二十日 日曜 む 晴。月如鏡。
午下早々、芝薫風会に参詣して、久々北野師の説教を聞く。四時、済て帰。
薫風会本年分、一(円)廿(銭)。

二月二十一日 月曜 ね 晴。陰、夜ニ入て雪ふり出したり。寒甚。
課業例の如し。

二月二十二日 火曜 うし
早起。水昌(晶) 世界となり、雪積る事七寸余、珍らし。研究生稽古日。雪の日なから、千葉よりも外みなよく来られたり。
津田え返書ス。

二月二十三日 水曜 たら 晴。
課業例の如し。

二月二十四日 木曜 う 晴。
課業例の如し。 昼早々、河田え行。 帰途、姉小路え寄、御子さまを見て帰。

二月二十五日 金曜 たつ 晴。
研究稽古日にて、昼迄。 午下、余、かくを連て神田淡路町宮内筆やえ行、筆を買て、また
眼金(一(眼)一屋え行、眼鏡を買て帰。
柳葉十、画筆二本、一(円)九〇(銭)。 目鏡等、寒暖計、一(円)八〇(銭)。 電車券三
十回、一(円)50(銭)。

二月二十六日 土曜 み 雨又雪。
課業例の如し。 午下、揮毫ものス。 夕景より、高城辰子此度良縁約成りて明日退塾二付、
寄宿舎にて辰子の送別会ニ出席。 晚餐を饗せられる。 九時帰。

二月二十七日 日曜 うま 晴 50(度)。 野田操、賜杯祝日。
朝より村井氏遺稿、表紙を揮毫して出ス。 予、李子と田端田村氏別荘ニ行。 久々に昔日
とハ大ぬに替りたり。 梅屋敷の名ハ有とも、梅ハ一本なく、枯れたり。 午前の内ハ説教三
座ありて、午後ハ余興種々ありて面白く、三時頃帰。
神戸神代より書至。

二月二十八日 月曜 ひつじ 晴。
微恙にて臥。 課業を休む。 神代え書をよす。

二月二十九日 火曜 さる 雨。
朝より雨なから、研究生も来りて賑々し。

(三月)

三月一日 水曜 とり 晴。
課業例の如し。 河田氏不参。

三月二日 木曜 いぬ 晴。
課業例の如し。 此夕、寄宿舎の雛祭にて、生徒一同と夕餐を共にして、大ぬに賑々しく面

白し。九時済。

三月三日 金曜 ゐ

朝の研究生稽古済。此時、安堂（藤）恭子女王様より速達御書にて、明四日御招きに相成たれと、中村氏との約有て、御断する。是ハ御初雛の御祝にて、閑御息所と、三条資君様と、予との御客のよし也。塾子供等の雛祭にて、加茂子供、葉室子供、親も、十五人の客にて賑々し。十時、済て皆帰。

三月四日 土曜 ね 晴、雨。

朝の教授済て、午下早々、有約、星ヶ岡へ行。中村元嘉氏の幹事にて素謡会、会員不参多、宮内省の戸田氏、飯田、奥氏、予と五人のみ。臨時、清浦、また野氏御断。素謡四番にて、夕餐をして帰、夜八時。然し、みな天狗連にて面白く。車夫え五十銭。

三月五日 日曜 うし 晴。

朝より揮毫ものす。午下、予、李子と京橋辺え金屏風詠に行。金額面にして詠而、其辺散歩しつゝ、陶器やに行て中皿を拵て、其隣家なる小池氏を問て、お清大悦にて、種々もてなしする。茶道具やにて面白きものにて、四時比迄遊ふ。帰宅。此時、正子来りて夕食を万里小路智子さまと共にして、九時頃帰る。

三月六日 月曜 とら 晴。

課業例の如し。朝より鶯の声しきり也。午下、散歩して帰。昨秋より庭の樹木取のけられて古巢もなく、今年ハ声の聞かれぬものと思ふに、

庭木みな取のけられて鶯の古巢たつねて来なく嬉しさ

三月七日 火曜 う 晴。50（度）。

朝より研究生教授して、午下、墓参して帰。揮毫ものす。二階水道洗面場出来二付、水を出したるに、洋館壁水にぬれて、早速大工、及水道部えしらせて見分する。エン罐（鉛管）に穴が有たるとて、全く水道屋の疎漏也とて、直ニ取直させる。

三月八日 水曜 たつ 晴。

課業例の如し。午前より、河田氏へ行。芝万里小路へ行。智子さま、十日京都え出立二付、御暇乞に行。帰途、閑院宮え参る。みな小田原に成らせられて、御留守さまにて帰。

三月九日 木曜 み 晴。

課業例の如し。揮毫ものす。午下五時、棚橋絢子来りて、夕食を共にして、謡二番うたひ

て、種々談話して、九時帰。

三月十日 金曜 うま 晴。夜雨。

朝、研究生教授して、午食後、散歩して、白山え御参りして、下瀬氏を問ふ。不在にて直ニ帰。大分県浅野時子え御手本出す。静岡角得定え画、及書を出す。尾道某え小包物却ス。

三月十一日 土曜 ひつじ 大雪。

朝、雨の中、牡丹雪と変して、みるく四、五寸計積たり。五年生の試験、昼迄。午下一時より泉会執行。笹川臨風先生講演、二時間二渡りて面白く聞たり。五年生の外十五人計、来り会す。横浜茂木栄子、恒子、其外も御出ニ相成たり。実に困難究（極）りなしと云日也。散会の時分ハ空晴たり。

三月十二日 日曜 さる 陰。

三月十三日 月曜 とり 雨。

本日より試験中。予の受持、午下より五年画試験ニかゝる。

三月十四日 火曜 いぬ 雨。甚寒。

朝より研究生の教授する。午下、五年の画試験ニかゝる。雪降り出し、勿（忽）一寸に及ふ。来客、幸島菊子、岡田徳子より之縁談断に来る。

三月十五日 水曜 む 雨又雪。43（度）。

朝より揮毫ものス。午早々、河田氏に行て帰。四年の画試験ス。本日、電話にて、幸島よりの断の事、岡田氏え申通ず。

岡田先生え五十銭。

三月十六日 木曜 ね 始テ晴。43（度）。

朝より揮毫ものス。午下、課業。四年生画の試験。

静岡角田年弘より蘭ヲ贈りたる書至。房州いく子より書至。朝鮮久岡麻子よりも。

三月十七日 金曜 うし 晴。

朝より研究の稽古する。昼迄。角田年弘より鍛冶屋蘭着。早々中村氏え蘭の事申伝える。直ニ取に来るへく申さる。本日午后五時より華族会館にて、原口五男亭と山本美恵子との結婚披露会に列す。前席貞水の講談二席、后食堂開かれて、八時過帰。九時過より雷鳴、牡丹雪にて勿（忽）にして一寸計積る。

三月十八日 土曜 とら 晴。

乾先生の十年祭二付、李子、青山に参拝して帰。予ハ試験にて多忙を究（極）める。

三月十九日 日曜 う 晴。

朝九時より五年生画絹本にかゝる、十二時過迄。午下校友会。おもなる人々集会して、午下一時、続々参集、寄宿舎十三号一はい、三十余人。李子より予の喜寿の祝二付、協義致し候処、みな大賛成にて、五月九日、十日と取極る。祝のバザ執行之筈。御菓子、御すしなど出して、みな五時過散会す。

三月二十日 月曜 たつ 晴。

朝十時より閑院宮へ参り、両殿下御参内中にて、其内還御。御息所様ニ拝謁申上る。廿二日より御子さま方及黒田御夫婦、安堂（藤）御夫婦も御同行、京都へ成らせられる御咄し共にて、私喜寿の祝二付、祝賀のバザを可致協義之事申上。御満足さまにて、夫より午餐を戴て、御玄閑迄出たる処、今飛行機墜（墜）落致したるとて、みな御庭に出たり。靈南坂辺と云。予も車を飛して東伏見宮を伺ひ、両殿下共、上野海の博覧会に成らせられて御不在と云。宮様の表御門の向と云。とても車にてハ行得られぬ。群衆山をなして、又大倉の方へ行たれと、とてもとて引返したり。夫より中村元嘉氏を訪ひ、過日の鍛冶や蘭をみる。実に見事也。已而帰。学校にてハ送別会にて、四年生より五年生を饗応して、今余興濟たり。是より食堂開かれ、呼れる。

三月二十一日 火曜 み 春季皇霊祭。晴。

朝より御宝前、仏前を掃除して、祖先祭執行す。午下早々、予、李子と墓参して帰。塾の子供等呼て、御供養。萩の餅などを出す。

津田弘視より支那の象牙箸着、予と李子え。重たけ（威）より書至。

三月二十二日 水曜 うま 終日雨。

午前より河田え行て帰。午下五時より有楽座え行。予、李子、雨宮と。孔（弘）道会慈善会名人会と云。面白し。十時帰。

房州迹見、木津柏原、静岡角田え。

三月二十三日 木曜 ひつじ

朝、雪又ハ雨。五年の画をみる。

上海津田え小包物出ス。

三月二十四日 金曜 さる 晴。

五年生の画をみる。夕景より予、李子、雨宮連て、銀座近藤塗器屋え行、ぬりもの種々あ

つらへる。十時過帰。

三月二十五日 とり 土曜 青天。
終日、生徒製作にかゝる。来客、富永発淑氏、中野より正子。生徒一同、式場に集め、終業式執行す。

三月二十六日 日曜 いぬ 青天。
早朝より生徒の製作品にかゝる。昼迄ニ出来上りて、訓辞をかく。佐（左）官や、壁の下ぬりに来る。
柏原種子より、せんへい小包着。柏原え返上ス。小林易太郎え。

三月二十七日 月曜 む 晴、風。
第廿九回卒業式執行。午下一時迄に職員生徒集、父兄も。一時執行。先、校歌、授与式、卒業者八十九名、校長訓辞、終而来賓中崎博士演舌、次二角田氏、すへて静粛に矩（規）律よく斉ひ、感に堪たり。式全畢、後、卒業生歓迎す。日暮、皆済。

三月二十八日 火曜 ね 晴。
五年生謝恩会。十二時半ニ職員集る。二階裁縫室余興場として、卒業生のみにて、琴、三弦、及活人画、其外種々の芸事ありて面白く、次ニ下習字教場にて食堂開かれ、百廿人余りにて、種々饗応あり。日暮、全済。別れに臨みて名残惜しさにみな涙のみ。

三月二十九日 水曜 うし 晴。 平沢須磨子と三土（宮脇）氏の結婚披露会。精養軒に行。

午前十一時半より河田氏え行。帰途、石山基陽氏を問て帰。
（以下、三一日ノ記事混入カ）
午下三時より華族会館にて江副隆一氏と子爵曾我ノ嬢竜江と結婚披露会ニ会。実ニ盛会。三百人とか云。七時帰。

三月三十日 木曜 とら 雨。
終日揮毫ものす。

三月三十一日 金曜 う 晴。
午下二時半より華族会館にて江副、曾我子の結婚披露会ニ会す。

（四月）

四月一日 土曜 たつ 雨。
終日、揮毫ものす。

四月二日 日曜 み 晴。

朝、散歩して帰。来客、属松子 其母と、竹中花子 其母と、大炊お駒 久々にて家の改築をみせたりして、御合の物など出して閑談す、暫時にして帰、島田信子。李子、横浜原氏え行て、日暮帰。

四月三日 月曜 うま 晴。

紀元二千五百七十六年、陛下行幸御親祭在らせられる。予、李子、塾ニ残りたる者と十二人連にて、玉川え摘草二行、土筆沢山に摘む。今年ハ至ておそく、全くなき事と云。然し、その割には籠に二はいも在て、終日面白く。浦磯吉、つや子も来りて遊ぶ。夕景帰。日本一の好天気也。

四月四日 火曜 ひつじ 晴。

朝、散歩して帰。閑院宮より御使、志水ふき 其母と、相馬琴 其母と。
返書、京都山科言綏、福岡県黒崎町山本東樹、静岡小川清、播州別府港多木久米次郎 金拾
田却ス、海事協会え承諾ス。

四月五日 水曜 さる 雨又晴。さむく。三日月清し。

朝、少雨、雪を交る。已而晴たり、曇りたり。来客、桐島細君、中野正子、肥田氏、細君
と其嬢、若麻續（積）の母、斯波暉子、其母、新田菊、其娘、安井母、其娘、中村芳子。
本日、入塾者多く、困（混）雑を究めたり。橋本太吉氏。

四月六日 木曜 とり 晴。

始業式。新入生、午前八時、参着。旧学生、九時着。始業式執行。校長勅語拝読。畢而生徒一同新入生と初対面す。入替りて新入生式場に集め、校長より生徒心得の話しあり。畢而主事大東氏演舌。李子よりも申聞もありて、式全畢。新入生百八十八名也。父兄の附添も多く、盛也。晡時散歩して帰。

四月七日 金曜 いぬ 晴。

朝、久米民之助より、母幾子五日夕死去のよし、訃音来ル。予、本日より学校二年生健康診断にかゝる。九時より車にて上の原久米氏え悔二行。棺前にて三時間余、香を焼き念仏ス。昼飯を呼ハれて、一時頃帰。帰途、石山大炊氏を問て、六時過帰。
久米え香料、五円。

四月八日 土曜 む 晴。

本日より、生徒健康診談（断）にかゝる。陶器の下絵、忙殺せらる。

四月九日 日曜 ね 晴。

予の誕辰二付、中野跡見一同を呼ぶ。昼時、みな来る。午餐を共にして夕景迄。

四月十日 月曜 うし 晴。風甚し。65（度）。

朝より、渋気（什器）御盆類下絵の揮毫。近藤の店の者来りて応待する。松尾臣善男訃音に接して、十二時早々、松尾氏に悔二行。東伏見宮え参り、閑院宮え参り、明日御渡台二付、御暇乞申上る。スミス飛行機中（宙）返りを見る。只さへ此烈風に実に飛鳥の如し。此朝、散歩して、始而桜花の二、三りん咲たるを見て嬉しさ限りなし。

松尾男え香料、五円。

四月十一日 火曜 とら 晴、無風。 閑院宮御出発。

朝八時三十分（八分）、東京駅御出発。御両所様、御機嫌よく御発車被遊候。御見立盛也。此帰途、田村え近火見舞に行て帰。

四月十二日 水曜 う 晴。

朝、散歩して、花の五部（分）通り花（咲）出たり。午前より河田氏え行。江戸川の花、勿（忽）七、八部（分）咲出たり。松尾臣善男の葬義、大東氏会葬ス。

四月十三日 木曜 たつ 晴。海事協会、上野博覧会、朝十時迄。

朝、散歩して阿部邸わたりの花をみて帰。八時、車を命して上野海の博覧会二行。十時、東伏見宮御息所御台臨にて婦人部会員大勢御供して会場実見説明を聞く。畢而御昼餐、予等も折詰にて、午下一時頃より余興場に成らせられ、松本幸四郎、七福神の躍、其外芸妓の躍と三番見て還御なる。一同、御送り申上て帰。本日、花の咲も残らす散もはしめず、花の第一等、上野の山を廻りて実に花の世界、処として花ならざるハなし。来客、下瀬氏。

四月十四日 金曜 み 晴。夕景より雨。

朝五時より、予、李子、五年生を拉して、江戸川の花をみる。実に咲も残らす散もはしめず、しら雲の朝日にかゝやく風色をみて、大廻（曲）りの花屋にて、みな花を求めて帰。七時前也。来客、加藤秋子、母と御礼に来る。

四月十五日 土曜 うま 雨。終日、雨降り通したり。課業例の如し。

四月十六日 日曜 ひつじ 晴、午下雨。
午下早々、芝薫風会に行。北野師説教聴聞ス。畢而空かき曇り雨ニ成る。万里小路を問ふ。
御不在にて、公園内所々の花をみる。春色あまねし。四時帰。来客、葉室伯。箕作縫子え
結婚の祝もの出ス。

四月十七日 月曜 さる 晴又陰。

早起。阿部邸辺の花をみて帰。課業例の如し。来客、里村母と娘、石山貞江、二三子を連
て始めて来る。庭の花見する、井深氏も。

四月十八日 火曜 とり 晴。

早起。牛天神え参詣して帰。課業、朝より午下三時迄。夜、月清光にて、予、李子、靖子
と上野の夜桜を見て帰。

四月十九日 水曜 いぬ 晴。

朝八時より、課業如例。正子来り、予、墓参して植物園に行。花もはや過たり。四時帰。
京都十松屋より金地扇面着。

四月二十日 木曜 む 晴。

朝、白山ニ参詣して帰。課業、午下三時迄、五年一ノ組済。来客、藤堂俊子、芳子、長尾
数寿子、指ヶ谷土井細君、岩崎武治、橋本静水、相川勝治、長瀬、今一人、三浦、相川、
古山、香山梅子。
書至、神代鶴子。

訃音、高橋富士子、廿一日葬義。

四月二十一日 金曜 ね 晴。

研究生稽古日にて昼迄。午下〇三十分より五ノ二ノ組にかゝる。三時済。来客、清水初子、
田中久。夜九時十分前、地震。夜、小雨。祝賀バザー書状出来ス。

四月二十二日 土曜 うし 陰、又少雨。

課業例の如し。五ノ二ノ組、うちは(団扇)書上る。李子、芝辺方々え行。

四月二十三日 日曜 とら 雨、終日。

(四月二十四日〜四月三十日、記載ナシ)

(五月)

(五月一日〜五月三十一日、記載ナシ)

(六月)

(六月一日〜六日、記載ナシ)

六月七日 水曜 む 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々、浅草新谷町本然寺に参詣。此時、有約、鳥尾後室智世子と先在、山科師紹介にて日置黙仙禪師に面語。師の乞によりて、新製の五丈ケサ(袈裟)に墨連(蓮)を揮毫す。余の扇子には面白き、(以下、空白)清風有年経幾多人快活無碍と云。夫より授戒の説教を聴聞して帰。観世音に参詣して帰。明日の準備ス。

六月八日 木曜 ね 晴。

朝八時、予、雨宮を連れて、東京駅八時四十分発汽車にて酒匂二行。国分(府)津駅にハ星野花子夫人と正一児と迎へられて、電車に乗て十一時前二藤井撫松庵に着す。瑞枝刀自、悦び甚し。何くれと種(々)歓迎せられて心地よく、昼餐を饗せられて後、星野氏二行。新築も立派也。また山本氏え行、庭中を見る。主人不在にて、明日より久爾(邇)宮様成らせられると云。夕飯は、また星の(野)氏にて馳走になる。庭中海辺散歩して帰。午下五時、雨宮帰東す。

六月九日 金曜 うし 晴、小雨。

朝六時起。心地よく、よく寐たり。身を清めて天地仏前に拝して、朝飯を喫して瑞枝刀自と予の伝にかゝる。

六月十日 土曜 とら 晴。

朝、海岸散歩して帰。伝記にかゝる。花子来りて、たにさく(短冊)、其外揮毫ものす。夕景より、予、瑞枝子と、車にて、小八幡の川つらに蚩狩する。沢山にて籠三ツに満々たり。

六月十一日 日曜 う 晴。

朝より伝記にかゝる。午下、予、花子と浦月子訪ふ。月子も悦んで種々の物話して、床にわ〔我〕か筆になりたる墨竹之掛物かゝり、よく出来たり、妹早苗よりかりたるなりと。

暫時にして帰。此夕、山本氏来て、庭に昨夜のほたる放ちて乱飛するを、久邇宮え献上の事を申出されて、一籠献上する。

六月十二日 月曜 たつ 晴。

此朝、久邇宮妃殿下御逢に成る。山本氏にて拝謁して、暫時御咄し申上而帰。浦月子来りて、御昼を供（共）にして後帰、また伝記にかゝる。星の（野）花子ハ祝事の候て、東京二行たり。

六月十三日 火曜 み 晴。

朝八時より閑院宮御別殿ニ参る。本日、三条資君様成らせられる御約束にて、十一時前、成らせられる。先此御殿の御設置、浩養閣を御引にて、南向に成りて、其気色ハ御庭の北山に老松林をなして、麓ハさつきの花盛にて赤き山をなし、下に杜若の盛り、近くハ石垣山より筆を取りて、ぜん／＼（漸々）に真鶴か崎、海熱（熱海）の辺、或ハ大島、初島と云、天然の一大凶画にて、只々嗚呼と云の外なし。東ハ大磯、絵の島、三方ニ海をひかへて、此邸の為に天工の妙を得たりと云へし。松井氏の設ケイ（計）可思。又浩養閣の地に本殿を立てられる下こしらへ中也。先離宮中、外別荘にも、こゝを第一の風色と云へし。五時、資君様と自動車御同乗申上て帰。

六月十四日 水曜 うま 晴、雨。

朝より終日伝記にかゝり、一方の段落（落）は先々付たり。夕景より天降り出して、夜たゝふり通したり。

六月十五日 木曜 ひつじ 晴、雨。

早起。雨晴たり。帰京の準備もとのひて、藤井氏の簡易生活になれて自由也。予、まき女を瑞枝氏の替りに連て、拈（誥）別して帰。此時、雨にて、車にて国分（府）津迄行。九時十分の汽車にて帰。東京駅着の頃ハ晴天朗々たり。石山幾子、雨宮、車夫二人迎ひ来る。不在中、李子の丹精にて、内も奇麗に、庭の盆栽もかれすして、すへてよくて嬉し。此夜、藤井氏え礼状出ス。不在中の机上依（蝟）集、依頼もの、手紙類、山の如し。

六月十六日 金曜 さる 晴、雨、風。

晴雨不定。金曜の稽古する、昼迄。風吹通したり。来客、角田年弘氏、不逢。

六月十七日 土曜 とり 晴、風。
課業例の如し。

六月十八日 日曜 いぬ 晴、雨。

朝、散歩して帰。揮毫ものす。午早々、芝薫風会に参詣して、帰途、閑院宮え御礼に参る。妃殿下ニ拝謁して、台湾より献品種々拝見仰せ付られ、御夕飯戴て帰。

六月十九日 月曜 ゐ 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。学校寄宿舎見廻り如例。田島氏にて、唯信会説教ありて、参詣す、金森氏と。

六月二十日 火曜 ね 晴、雨。80(度)。

研究生稽古する。午下一時より師範学校教員二階堂氏の講話、英国留学、私塾女学校之感のへられて、面白く、みな悦むて聴聞す、四時迄。

六月二十一日 水曜 うし 雨、晴。

学校寄宿舎見廻りて、課業例の如し。午早々、河田氏え行て帰。

六月二十二日 木曜 とら 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下、学校見廻る。五島子より、わか芽(和布)着。

六月二十三日 金曜 う 晴。82(度)、午下90(度)。

朝、研究生稽古して(以下記述ナシ)。閑院宮御使。河津益雄婚約者ひたるにより、白紹一反、松魚一箱祝ふ。藤井瑞枝より、伝記草稿はしめて来る。

六月二十四日 土曜 たつ 晴。 河津氏結婚披露会、午下三時、築地精養軒。

朝、課業例の如し。九条様より御使。岡村尚子より桜桃二箱着。兵庫県但馬西村悠太郎えたにさく(短冊)返却。山形岡村尚子え。長崎五島善子え。

六月二十五日 日曜 み 午下五時より雨降出したり。 和慰会、中天亭、午下五時迄。

朝、宮原六之介氏来られて、午飯会食ス。畢而帰。午下五時より、予、李子と中天亭に行。万里伯を始め、先在、幹事万伯、森子也。親正(正親)町季董男、万里元秀男、近日露都え洋行二付、送別会。集ル者廿名。此亭之洋食ハはいからのはいからと云名に空しからず、みな美味也。九時過帰。午下五時頃より雨ふり出し、夜も降つゝく。雨の湿ひ、実に金の如し。植付も出来、先々安心々々。

六月二十六日 月曜 うま 雨。雨降り通したり。 本日より、午前七時廿分より正午十二時終。第一学期試験、七月十三日より十九日迄。 課業例の如し。

六月二十七日 火曜 ひつじ 雨。
研究科稽古する。

兵庫藤田、安藤様、石井はつ子え、箱館中瀬氏え。

六月二十八日 水曜 さる 雨。

朝、課業例の如し。正午より河田氏え行。帰途、赤城石山え行。謡と仕舞とにて三時過帰。
午下早々、李子、酒匂え行。

六月二十九日 木曜 とり 小雨。

課業畢る。河田氏え行。帰途、赤城石山氏え行て、謡、仕舞など見て帰。

六月三十日 金曜 いぬ 晴。

朝八時より上野撰書会に参列す。皇太子殿下行啓あらせられる。会長大原伯、松浦伯、岡部子、長谷子、また一(侯)野局長、花房子と予と、御前に拝謁仰付られる。八歳の童子より十二歳位迄の子供等、御前揮毫ス。畢而還啓あらせられる。十二時、相済て帰。

(七月)

七月一日 土曜 む 本日より試験。泉会。

午下一時より講演。赤十字看護婦を連て、独乙戦争之実見談を聞、鈴木氏。弘事、京都大
学試験及第して、時一(昨)日帰京。可喜。外二落第者も多しと云事也。

七月二日 日曜 ね 晴。

朝、行楽一(葉)して帰。揮毫ものス。来客、葉室伯、子供たち夕食を共にする、中野より
正子も来りて。

七月三日 月曜 うし

朝、行楽一(葉)して帰。課業例の如し。来客、長谷川千賀子。此夕、静すみ子の誕生祝
にて会食。千賀子、九時頃帰。

安藤、早川、石川、房州あとみ一(跡見)え。酒匂藤井え。

七月四日 火曜 とら 晴。

朝、散歩して帰。校外生稽古する。午下三時より中野跡見え招かれる。弘事、法科大学卒
業二付、その祝旁、予、李子、靖、石山も同道、晨子、すま子とにて叮嚀に饗応したり。
ゆるく遊ひて、畑のもの、唐なす、冬瓜、まめ等をもらふて帰。八時頃也。

七月五日 水曜 う 雨。
課業畢る。正午、河田氏え行。

七月六日 木曜 たつ
朝、散歩して帰。課業如例。

七月七日 金曜 み 雨晴不定。
校外稽古日、如例。午下三時頃より、予、雨宮と三越え行。七夕の笹たて、昔に帰りたる飾、奇麗なり。種々買物して、帰途、清水え寄、初子の病を問ふ。未たよろしからず。熱度九度二、三部(一分)ト云。本日四時頃より起て、喜の字、朝七時迄二十五葉揮毫ス。

七月八日 土曜 うま
朝、散歩して帰。課業例の如し。叙勲記念日ニ付、職員一同え襟飾、シャツ二、半襟二ツ、贈ル。夕景、万里伯来られて晚餐を共にス。

七月九日 日曜 ひつじ 晴雨不定。
方々え中元贈り物ス。午下より閑院宮様え参り、両殿下ニ拝謁、種々御咄し申上ル。台湾より御持帰りの盆栽台拝領す。夕景、玉枝来られて、晩食を共にす。寿品広蓋献上ス。

七月十日 月曜 さる 朝雨、后晴。
朝、雨中散歩して帰。課業例の如し。午下、俄に大雨。往来浸水。暫時にして引たり。雷も交る。是にて梅雨晴たれ(一り)。

七月十一日 火曜 とり 晴。
朝、散歩して帰。校外生稽古する。来客、中田兼、石川静江、支那人李文権 面会、増田浪江。

訃音、上海津田栄より書至。戸田米子、九日逝去。十七日送議(葬儀)。

七月十二日 水曜 いぬ 雨。
課業例の如し。正午、河田氏え行。加賀町戸田氏秀夫人米子様逝去ニ付、御悔二行。極子様、孝子さま、幸子様御なけきおもひやられ候。参拝して帰。
上海津田え返書ス。鳥尾照子の訃音にて驚入たり。

七月十三日 木曜 ゐ 雨。
本日試験にかゝる。四年三組を集めて、端書の試験をみる。

七月十四日 金曜 ね 晴。
金曜、稽古納めをなす。来客つゞきにて、終日。

七月十五日 土曜 うし 晴。

天全く晴たり。課業、試験をみる。昨日、原氏より電話にて、本日五時頃より泊り掛にて、タゴール氏と会食すると云。午下三時より、予、李子と同道ス。先、原氏紹介にてタゴール氏ニ面会ス。暫時挨拶やらにて、是迄女子の客は始めにて、原氏の細君やらの御教授なされたる御師匠にて驚(翹)望いたして居つた、今、御面晤を得て嬉しいと云。同伴者、英国人、(二三空白)印度人にも面晤ス。食事ニ付、タゴール氏ハ風彩(采)奇相、容貌も実に积尊に似たり。種々珍談もありて、食事中面白く、譬へ言、実に面白く即座に伸へられたり。食事テエブルの上、皿敷と云、みな蓮の葉をしき、真中に大きい花皿に紅白蓮花をうず高く盛りたり。印度にてハ皿の交(更)りに葉をしく事、例也。清浄にして心地よし。わか神代の柏(膳)屋の如し。食事畢、露台にて、十六夜の月、海面に銀の橋をわたしたり。種々なる奇談もありて、十時過る頃迄。下において海岸散歩。月見草の広く咲たる中を行、黄金の世界也。十一時、寐に就く。閑院宮様よりヒヨウホン(標本)に成もの沢山、台湾より御持帰りの品々、荷車にて戴く。

七月十六日 日曜 とら 晴。

朝起て園中散歩、安子、予と、李子と。蓮花の開く真盛也。種々草花の中を行て、待春軒に憩ふうち、御弁当、朝料理にておいしく戴きたり。草花を見つゞゆるくと帰る。みなと雑談中、また午餐を呼はれて、三時過、自動車にて桜木町迄、それより電車にて帰。

七月十七日 月曜 う 晴。 鳥尾照子、午前八時葬式。午前九時、戸田米子葬儀、伝通院にて。中野弘、本日より原氏え出向ル。

朝九時前、伝通院に会葬ス。李子、鳥尾子護国寺え会葬ス。夕景より、驟雨覆盆、雷鳴しきり也。已而晴。月清し。

七月十八日 火曜 たつ 晴。 授業納。

朝、散歩して帰。授業納をなす、昼迄。

七月十九日 水曜 み 晴。

朝、散歩して帰。閑宮様より御依頼の絁地福寿を揮毫してさし上る。正午前より河田氏行。本日より休み。午下三時過より宮城え参る。園典侍さま御局にて、汲泉、陛下え献上を願ふ。典侍小菊さまと種々御咄し申上て退る。園典侍さまも愈御辞職御聞済に相成て、此廿五、六日、園家え御下りのよしにて御困(混)雑也。御部家(屋)子さま、土御門、

正親町鍾子さまえ、御預ヶに相成たり。

七月二十日 木曜 うま 土用太郎、天晴朗。晴。か(賀)田きく子、台湾より来る。朝、散歩して帰。来客、中村元嘉氏。午下七時より日露協約祝賀会。東京実業団体提灯行列、花火ハ上り通して、総人員三万七千人と云。

七月二十一日 金曜 ひつじ 二郎もよし。晴。校外生終業。

早起。白山に参詣して帰。揮毫ものス。塾生一同、明日三の溪の蓮花を見につれて行約速(束)する。黒木仲子、洋行ニ付送別会、教員室にて昼餐会也。

越後北安曇郡柳沢信一え画出ス。山中秀え。

七月二十二日 土曜 さる 三郎もよし。晴。

朝四時より起て、こ(し)らへする。五時、一同出門。同勢九十七人也。東京駅より電車にて。朝涼気心地よし。七時後、三の溪に着。十里荷香花尤満開、歩々清風起を、白露の亭に休憩所準備出来たり。先此処にて一同朝飯の弁当をつかふ。予等、田舎やにて御むすひの美味殊更にて、辻の家内など来りて、せわ(世話)してくれられ、堯子も来る。タゴール先生より使にて、生徒等に御面会いたし度よし、今三十分之内、参るへき約したり。それより所々草花を見つゝ、山の六角堂に眺望する。海の風、殊に涼気を覚ゆ。夏尚寒しと云。上の広間に生徒一同をつれて、タコール先生に面会ス。云、この一人の仙人の様なるものに、大木の松の間より朝日のかゝやきたるをさしこめられて嬉し、予ハ日本春の花を得見す残心の処、けふはからすも朝にかゝやくさくらの花の咲出るをみる事、嬉しさと挨拶。生徒一同、校歌を唱ふ。その外も二唱歌。また、うたと云、ふしと云、声と云、得も言はれぬカリヤウビンカ(迦陵頻伽)の差へづりかと、校衣も大そうほめて、美術的よりもみなよく出来たり、この様にハなくと思ひたりと云。午下一時、一同立さりかたきを引上たり。予、李子、原氏より午餐の馳走にあひて帰。

七月二十三日 日曜 とり 晴。

早起。散歩して帰。終日揮毫ものス。来客、長尾数子、姉小路延子。津田より電報、アス午後チャク、ヤマシロ〇(マル)ニテ。夕餐、寄宿生送別会にて七時より食堂開らけ、料理、ばらすもし、肴のフライ、枝豆、サイダ、漬もの、菓子、水羊羹、葛もち、水蜜桃、バナ、と云。一同面白く賑々しく。校長よりシドロン五ダース寄附。九時、万歳の声と共に退散、めてたし。

七月二十四日 月曜 いぬ 小雨、晴。終業式。

早起。散歩して帰。小雨、已而晴。生徒一同、職員一同、講堂ニ参集ス。校長演舌、主事要件等、李子の生徒への注意演舌ありて畢。琴曲、奥、中、裏ゆるしを受ル者十一人あり。

上海津田一行、午下二時横浜着なから便りなし。大ぬにあんじたるに、夜八時、中野え着のよし申来る。先々安心。

七月二十五日 火曜 む 雨。 校外業、終業。

朝より、予、靖子と中野え行。津田（以下、記述ナシ）。小包物、九軒え出ス。

（七月二十六日、記載ナシ）

七月二十七日 木曜 うし 雨。

朝、散歩して帰。閑院宮妃殿下と御約束申上て、午下三時より安藤様え参る。妃殿下成らせれ、御合のものいたゞきて、夫より御陪乗申上て、三条資君様え参る。御悦さまにて、けふハ水入らすとて、御心安く御談話など被遊候て、御陪食申上、ゆる／＼と、夜九時頃まてにて帰。

京都大聖寺、高倉様、大坂唯専寺、願泉寺、寺田、兵庫神代、岐阜遠藤、房あとみ（跡見）、はかき出ス。

七月二十八日 金曜 とら 雨。

昨日より雨降つゞく。晴間なしにふりたり。弘、精つれて来る。此夜、黒木仲、浦塩え出立二付、李子、雨宮、八重子も、中天迄行、見立ル。十二軒、はかき出す。

七月二十九日 土曜 う 雨。

朝より雨降つゞけたり。揮毫ものス。豪雨となる。暴風雨となる。晴間をみて、予、東伏見宮様え参る。実に其雨と云、暫時御咄しして帰。黒田侯、九条公え暑中ニ参る筈とて、車も飛され（以下、記述ナシ）。

（七月三十日、三十一日、記載ナシ）

（八月）

八月一日 火曜 うま

朝、墓参して帰。

（八月二日、三日、記載ナシ）

八月四日 金曜 とり 晴。

朝、散歩して帰。午下五時半、予、李子と約ありて角田氏に行。世間七夕祭りも絶て、此優美なる年中行事も廃されてある七夕祭りを鼓吹して、種々なる礼をとりて、祭壇（壇）もよく斉ひて、角力士俵場を設けありて、発句競争もあり、それハ明日の七夕二行ふ事。予、李子、石井健吾夫婦招かれて、晚餐を饗せられ、趣味多く、実に珍らし。夜九時帰。

八月五日 土曜 いぬ 七夕也。晴雨不定。

朝四時起て、喜の字廿一枚揮毫ス。

八月六日 日曜 ゐ 晴雨不定。

朝、散歩して帰。揮毫ものス。

八月七日 月曜 ね 清（晴）雨不定。

朝、散歩して帰。揮毫ものス。夜、石山基陽氏来られ、素謡鉢木一番、済、仕舞をも見る。上達也。

八月八日 火曜 うし 立秋日。晴雨不定。

朝、散歩して帰。九時より車にて代々木大炊御門へ行。それより初代（台）なる志賀鉄千代君を問ふ。新築落成にて、頗る広く立派に出来て、方々と拝見して、昼時、大炊氏にて昼飯を呼れ、吉子様、御子さま、御駒殿も家政君えみな集りて、心易く夕飯も呼れて帰。地震。

八月九日 水曜 とら 晴雨不定。

朝、散歩して帰。来客、長岡愛子、戸田極子。揮毫す。李子、鎌くら（倉）橋本氏へ行、夜帰。

八月十日 木曜 う 晴雨不定。

朝、散歩して帰。戸田伯より御依頼の帛紗、下絵揮毫ス。来客、朝、新田純興。小田原津田え書をよす。外に甘軒、書を出す。

八月十一日 金曜 たつ 晴雨不定。

朝五時起。散歩して帰。揮毫、戸田伯帛紗下絵二枚上る。来客、上野石子、大炊御門晨子。酒井氏扇面、十九枚落製。

八月十二日 土曜 み 晴雨不定。

朝五時より散歩して帰。揮毫ス、金扇十枚を。雨宮帰。津田より始而書至る。大安心。福

岡小野幸子え小包もの出ス。来客、万里小路正秀 露国^え明日出發、暇乞に来る、鎌田みより。津田栄子一行、母に連れられ、七時小田原え着し、正子九日帰京と云。

八月十三日 日曜 うま 晴雨不定。
朝、散歩して帰。揮毫ス。李子、中野え行。

八月十四日 月曜 ひつじ 晴雨不定。
朝、散歩して帰。揮毫ものス。本日より神翁え齒の治療に行。今夜、万里小路元秀男、露国行。東京駅二見立る。貴族院よりも五名同行二付、大変なる見送り人、可驚。九時、万里^(一歳)声理^(一裏)に出発ス。万里伯ハ京都え。月清く、すゝし。

八月十五日 火曜 さる 晴。
朝、墓参して帰。揮毫ものス。

八月十六日 水曜 とり 晴。 本日より河田氏行。
朝、散歩して帰。揮毫例の如し。来客、弘、中根。

八月十七日 木曜 いぬ 晴。
朝、散歩して帰。揮毫例の如し。村井弦齋氏よりの西瓜、実に甘露の如し。宇津美、中根、石子を呼て西瓜の馳走する。津田栄子より手紙にて、十九日帰京するよし申来る。

八月十八日 金曜 ゐ 晴。
朝、散歩して帰。揮毫ものス。小田原津田栄子より電報、明日三時東京駅着。四時半より神翁え行て帰。

八月十九日 土曜 ね 雨。終日大雨。
朝、空あかく紅の如し。其内空青くなりて雨ふり出したり。李子、内海、井上と女中を連れて、軽井沢え出立ス。朝八時、神翁え行。午下三時迄に銀を東京駅え向^(一迎)に出ス。四時過、栄子の一行無事帰宅ス。弘、迎ひに行てやりたり。

八月二十日 日曜 うし 晴。
子供等にて賑々し。中野正子来る。上海津田え書をよす。藤井瑞枝え同。茂木松子え短冊出ス。

八月二十一日 月曜 とら 晴。
朝、散歩して帰。揮毫ものス。

八月二十二日 火曜 う 晴。
朝、散歩して帰。

八月二十三日 水曜 たつ 雨。
雨ふりつゝく。

八月二十四日 木曜 み 雨。
雨終日ふりつゝく。此夜、予、軽井沢行決す。神翁え行。左の齒出来ス。

八月二十五日 金曜 うま 晴。
朝、天満宮え参詣して帰。中野夫婦来る。藤井瑞枝え書をよす。

八月二十六日 土曜 ひつじ 晴。
朝六時五十分、上野汽車にて、軽井沢行。一行、予、中根、浅倉と三人連。熊谷辺にて雨ふる。やかて晴たり。妙義山、面白う雲のかゝりて、

あら妙義面白の雲や秋の色
隧道の秋ハさそと此秋必すと、此山に約したり。程なく臼井（碓氷）に着。李子、内海、浦四三子、佐藤実など迎ひに來りて、電車にて新莊に着。先、家の向きから間取の工合共、よく建られ、間（簡）易生活もほこり也けり。座敷より見たる処、愛宕山、浅間山の山間二人家ホツ々々五、六軒もあり。真に山水中図の如し。是軽井沢第一の風色と云へし。予、此宅を靈秀山莊（と）命名したり。午下、みな愛宕山に登る。宅え端書出ス。

八月二十七日 日曜 さる 晴。
朝早起。先居なからの気色、実に面白く、此靈秀をみる。山みな笑ふてわれを迎ふ。清涼はだへによし。市村一郎氏来る。夜、散歩して、鶴屋逢て、明日押出し行を約して帰。

八月二十八日 月曜 とり 晴。
朝五時起て、みな食物、麦湯等の準備して、大八車を引き来る。これに乗て行。予、李子、中根、朝倉、井上、浦四三子、海老原、九阜（阜）氏と八人也。行程十里余と云。此道すからの秋の八千草、濃き薄き、綾とも錦とも、何に譬へん、只々あゝあと眼をなくさむ計也。坂の茶やより、みなをりて、予、李子と車にて行。若立の茶や、昼弁当をたうへる。それより小朝（浅）間山を廻りて、此時、写真屋にふと逢て、此馬車中を撮影す。偶然妙。山又山に登りて、一望千里といふ、きはみなき広原、枯木と焼石のみ。

一望千里焼山秋の浅間たけ
漸押出しに着。見る処、実に鎔岩岳々たる、横半里、豎三里と云。此岩を右を左りとよぢ

登而とうく絶頂二に(一桁)に至る。九臯氏、歴史演舌あり。実に快、云へからず。麓に岩窟ありて、万年氷をとりて、みな氷をかむ也。所持の麦湯、果物など、この窟にひやして涼をとる。三時こゝを立て行。

鎔岩岳々麓ハ秋の千草かな

喜寿のをうな押出し山に押上り

若立の茶屋にて夕食して、又みな馬車に乗る。これから各唱歌、或ハ種々なるをうたひて、楽しみ興して、夜九時、山荘に帰。

八月二十九日 火曜 いぬ 晴。

朝とく起て、庭のけしきを詠め、右左、浅間愛宕を庭に入れて、君子気取て山を楽しむ。午下より臼井(一碓氷)峠を散歩して、夕餐済て、みな音楽会二行。余、李子ハ買も(の)に行。

八月三十日 水曜 む 晴。

朝とく起て、此山に名残をつけ、是非此秋ハと約束して、十時の汽車にて、李子をはしめ、古市夫人、嬢と市川氏、佐藤実、鶴や、停車場まで送られ、御健全万歳声理(一裏)に、汽車はしる。横川辺より風あつく、駅々より熱風にて、三時上野に着。津田栄子、雨宮、青木等迎ひに来。先々無事可悦。

明三十一日、津田栄子の一行、山城丸にて帰る。夕餐送別会、子供等と共に。

八月三十一日 木曜 ね 晴。

早起、出立準備齊ひて、予、雨宮、井上等送る。東京駅発七時半、みな無事に出発ス。泰、弘ハ横浜乗船迄送る。政子、靖子、早苗も。

(九月)

十二日より稽古はしめ。

九月一日 金曜 うし 晴朗。90(度)。

早起。墓参して帰。二十十日。実天気晴朗、暑気、当年之第一、九十度也。午下三時より閑院宮え参る。両殿下に拝謁して、押出しの御はなし申上る。元気に御感心遊されたり。神翁え行。

御出発十一日朝八時半。

九月二日 土曜 とら 晴。

朝、戸田極子様御出、御礼のため也。午下、神翁へ行。午下、時事新報記者。

九月三日 日曜 う 晴。90 (度)。

朝、散歩して帰。来客、酒井正吉。時事新報二押出し行の写真出たり。夜八時五十分、李子の一行着。予、井上、春木、迎ひに行。みな無事着。雨宮ハ熊谷え立寄、一泊。

九月四日 月曜 たつ 晴。88 (度)。

朝、散歩して帰。神翁二行。本日にて義齒も出来上りたり。

九月五日 火曜 み 晴。88 (度)。

朝、散歩して帰。靖子帰塾。正子も来る。

九月六日 水曜 うま 晴。88 (度)。

朝、散歩して帰。八時、職員、生徒参集。始業式。校長挨拶、主事衛生談、李子授業に付ての咄し有て、式全畢。来客続々。松崎悦子、岩倉慶子と御礼に、正木細君 倭文字御礼に来る。

九月七日 木曜 ひつじ 晴。残熱甚し。

朝七時半より授業始をなす。

(九月八日、記載ナシ)

九月九日 とり 土曜 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。

九月十日 日曜 いぬ 晴。八十八度。

朝八時半過より、予、内海同道、観世に能をみる。久々にて実に面白く、切を残して帰。朝、久米権九郎、新ガツホール(シンガポール)へ近日出発二付、暇乞に来る。自動車に同乗して観世迄行。

九月十一日 月曜 ゐ 二百廿日、天晴風甚。晴。風。閑院宮、露国御出発、朝八時半。

朝七時半より東京駅二行。閑院宮殿下、露国御出発、奉送之人々、皇族方を始め、総理大臣より文官、武官、実は大勢ブラットホームハ立錫の地もなく、赤十字愛国婦人会よりも。氷川神社え一円。善光寺、小包、八錢。

九月十二日 火曜 ね 晴。本日より稽古はしめ。石井謙吾氏、月見の宴に招かる。

此早朝、散歩して帰。朝八時より研究生授業する。夕景五時半より、予、李子と石井氏え

行。角田夫婦、志賀鉄千代と也。建築之數寄を好める、英国田舎之洋館より座敷万端、庭園も美をこらしたる。月ハ、庭の森をへたてゝ風情ある月みる。食事ハ借樂の支那料理にて、塩梅頗美味なり。十時頃帰。

九月十三日 水曜 うし 雨。60 (度)。

朝、散歩して帰。此時より雨降出して、終日降通す。実に金のふる如く樹木のために結構々々。午前より河田氏へ行。又石山基陽氏を問て帰。始めての冷氣、せる(セル)に袷羽織。李子、上京の久米氏と志賀氏へ行。万千代男子出産ニ付、権九郎新ガツポール(シンガポール)十四日出発也。

九月十四日 木曜 とら 雨。

雨にて散歩せず。課業例の如し。午下、予、李子と送別に行、東京駅。久米権九郎無事出立す。

九月十五日 金曜 う 晴。80 (度)。

金曜稽古始。堀田伴子様をはじめ、角田二人、大島、茂木、河村、山田と也。

九月十六日 土曜 たつ 晴。85 (度)。

朝雨、已而晴。課業例の如し。午下、予、李子、雨宮と芝公園秋草萩をみる。今一周(週)間早し。公園中逍遙して、万里家え寄、一休憩して帰。上野婦人子供博覧会ニ付、当校出品、陳列場ニ石山氏行。竹田氏始而来る。

九月十七日 日曜 み 晴。83 (度)。

揮毫ものス。来客、石山吉子、大炊駒女。東伏見宮様より御命しの画さし上る。

九月十八日 月曜 うま 晴。82 (度)。

朝、散歩して帰。課業例の如し。李子、八重子、上野博覧会陳列場見分に行。津田弘視、門司より書至。

九月十九日 火曜 ひつじ 晴。夕景より夕立がゝりた雨、暫時にして止。82 (度)。

研究生稽古日。午下、揮毫ものス。竹田氏、李子もはしめる。

九月二十日 水曜 さる 彼岸入。晴。83 (度)。

課業例の如し。正午前より河田氏へ行。閑院宮御留守の御伺申上る。御息所に拝謁して帰。

久米権九郎書至。

九月二十一日 木曜 とり 晴。80 (度)。
朝、白山に参詣して帰。津田弘視、久々にて来る。暫時談話して帰。課業例の如し。
竹田氏、李子も。

九月二十二日 金曜 いぬ 晴。80 (度)。
朝、墓参して帰。研究生稽古する。夜、予、李子を(と)神饌もの買に行。此時より雨。
石山基陽来る、橋岡舞台ニ付寄附頼みに。鳥取西伯郡板愈良え短冊ニ出ス。

九月二十三日 土曜 ゐ 秋季皇霊祭。雨。65 (度)。
祖先祭執行ス。夕景より東二弦琴を聞く。内海氏紹介。はしめて寒さを覚ゆ。

九月二十四日 日曜 ね 雨。65 (度)。
終日読書のみ。

九月二十五日 月曜 うし 晴。
課業例の如し。山陰新聞え、藤田、茂木え。
竹。

九月二十六日 火曜 とら
朝、散歩して帰。研究生稽古する。来客、早川や寿、母と。
竹田氏、もゝ子も。

九月二十七日 水曜 う 雨。
朝、散歩して帰。課業例の如し。例刻、河田氏え行、帰り、揮毫ものス。

九月二十八日 木曜 たつ 雨、晴。60 (度)。
朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、五島万千代 昇兒と春と、岩浪稲子、石川房子。
京姉小路え小包物出ス。山中秀子え。
竹田氏、もゝ子、雨宮も。

九月二十九日 金曜 み 晴。60 (度)。
朝、散歩して帰。研究生稽古、昼迄。午下、神翁え行。至而寒し。李子、清水初子の病を
問ふ、小石川病院に。
書をよす、京都姉小路、横浜原氏え。

九月三十日 土曜 うま 晴。60(度)。
課業例の如し。

竹田氏、もゝ子、雨宮。

(十月)

十月一日 日曜 ひつじ 晴、雨。60(度)。
予、李子と觀世会に能をみる。夕方帰りかけ、雨ふり出したり。俄然冷氣、袷羽織を着る。
夕、弘来る。雨宮、母の病氣ニ付、出立ス。はしめて袷を着る。

十月二日 月曜 さる 雨。

本日より授業、午後二時迄。課業例の如し。

信州大宮尼、安堂子え小包出ス。

十月三日 火曜 とり 雨。

研究生稽古する。朝、秋月菊子訃音来る。実に驚入たり。本日葬式、青山祭場にて。李子
会葬ス。

竹田氏、予一人。

十月四日 水曜 いぬ 雨。

課業例の如し。午早々、河田氏へ行。夫より秋月氏に行、悔をのへて参拝して帰。石井初
子を問ふて、書画の教へをして夕景帰。夕景より又雨ふる。藤井氏え草稿校正出ス。

十月五日 木曜 む 陰。

課業例の如し。夕景、散歩して帰。

竹田、予と李子と。

十月六日 金曜 ね 陰、雨。

研究稽古日。

十月七日 土曜 うし 陰。

課業例の如し。来客、幸島菊子、進十六氏 毛利公令嬢之事ニ付御依頼相成たり、京都御寺御所祖
瑠(琉)久々にて面会。種々旧を話して、園通寺三十三番觀世音不足二体建立に寄附を頼まれ五円出ス。

竹田氏、予、李子と。

十月八日 日曜 とら 晴。

朝、散歩して帰。九時より閑院宮様え御留守さま御機嫌伺ニ参る。御息所様小田原え成らせられて御不在、お幹老女と暫く御咄して帰。昼早々、予、李子和横浜へ行、原氏を問ふ。弘就職の御礼ニ。園中秋草をみる。雨にて残花、薄、蓼花、雁来紅、其外少しハ秋を（の）色をみせたり。此日、はしめて雨なく珍らし。主人富太郎、安子御夫婦に逢て、種々語る。帰路、自動車にてさくら（桜）木迄送らる。小池清と同道也。

十月九日 月曜 う 雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。愈、寺内総理太（大）臣内閣成立。来客、米沢竹子母。

十月十日 火曜 たつ 雨。

研究生稽古日。

竹田氏、予、李子和。

十月十一日 水曜 み 陰、雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。昼前より河田氏え行て帰。来客、進十六、面会。毛利顕子さま之件ニ付、李子和種々相談之結果、御断申上る外無之と断然。

十月十二日 木曜 うま 雨。

朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、小石川男御夫婦、やはり毛利顕子様の件ニ付、是非々々精神教育を頼度とて、御後室より呉々も御頼みの御使にて、今一応考さして戴度と申上候。学校内御覧ニ相成たり。五島善子様、令嬢和子を連れて入塾。

竹田氏、さし支ル。

十月十三日 金曜 ひつじ 雨。

研究稽古日。

十月十四日 土曜 さる 晴。

朝、始めて好天気にて、散歩して帰。課業例の如し。午下より泉会。二階堂女史講演。本日は好天気にてか、会員大多数にて、みな面白く、二時間半にて畢。竹田氏、さし支。

十月十五日 日曜 とり 雨。 薫風会。婦人法話会。

朝より揮毫ものス。午下一時より曙町倉持宅にて相談会。九条恵子様、岩倉梭子様、其外輪番桑門加藤僧などにて、十五、六人。会長留任、副会長を拵る事ニ決したり。五時帰。

十月十六日 月曜 いぬ 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、新田細君、久米民之助。新田紹介之前橋人母と娘、書画入門許諾ス。五島善子、小児福子さま連で一泊。

十月十七日 火曜 ゐ 神嘗祭。晴。

早起。墓参して帰。揮毫ものス。蓬萊山落成。

十月十八日 水曜 ね 晴。 原町酒井夏子様十年祭、午前十一時。

朝、散歩して帰。課業例の如し。十一時より酒井伯邸に参り、祭典ニ参拝ス。御客、三条千代子、藪篤子、山尾末子御夫婦、酒井御分家様、其外御旧臣古市氏、夫人たち。午餐を饗せられる。二時後、谷中御墓前に参る、三条様之御兄弟たちと。四時帰。

十月十九日 木曜 うし 雨。 大島陸軍大臣より、午下一時より。

朝、墓参して帰。課業例の如し。午下一時より、予、李子と大島陸軍太一(大)一臣官邸ニ参る。此日也、陸軍次官より其次々の人たち招待にて、昼の内、予等、横浜茂木栄子、恒子、棚はし(橋)等にて素謡会と云。予、弱法師、棚橋ひはり山、大島長江子姉妹、花かたみ等有て、後、細川風谷、宮本無三四講談二席。畢而食事二付、九時帰。

十月二十日 金曜 とら

研究生稽古する。

十月二十一日 土曜 う 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々より、かねて約束したる玉玲会婦人素謡会ニ二階をかして、十九人計ニて、午後五時迄に畢。棚橋絢子、横井細君、夕景来る。

十月二十二日 日曜 たつ 晴。

朝、散歩して帰。山階康追善会ニ平川(河)一町渡辺氏に誘れて能をみる。海士、千手。

十月二十三日 月曜 み 晴。

朝八時前より御茶の水高等師範え出向ル。皇后陛下行啓あらせられる。九時御着。我々等拝謁仰付られる。それより教室御順覧相成、又我等も御跡教授参観して、一先御休憩ニ付、此時、予ハ退く。約有て、予、李子、堀田伴子さま、斎藤仁子、雨宮、下部を連て、先代々木志賀君ニ行。重昂先生、代々木停車場迄迎へられて、志賀氏え行。暫時待合せて、二時頃より京王電車にて。

十月二十四日 火曜 うま 晴。

朝、散歩して帰。研究稽古する。来客、大坂高原慶三御礼ニ来る。

歌道奨励会、祝歌。古屋益世え、跡見いく子え、京都姉小路え、石井初子え、伊せ和田墨司え。此夕、万里伯より御知らせにて、房州跡見治子、急劇なる★(疔+役)利(痢)と断定したる由、申越されて、予、李子と驚愕、いかにしてよきやら、とても渡房致しても側えも行かれず、万里さまと清水とも相談して、井深氏渡房を頼むより外なきと一決して井深を頼み、早速承諾、明朝一番にて迎向ル事に相成たり。

竹田氏、予、李子も。

十月二十五日 水曜 ひつじ 天晴朗。 観艦式、陛下行幸。

課業例の如し。此日、河田行。石山基陽さまを問ふて、橋岡え寄附金五拾円を渡す。それより小石川病院に清水初子を訪ふ。病危篤とも思はれず。此朝一番にて、井深氏渡房する。清水連郎も来る。種々家経(計)の事ともかたり、困難らしく思はれたり。此日、始而某より、上芝岩太脳病、卒とうして岩佐病院に入院、危篤のよし申来る。此日より一万余念仏祈願する。

十月二十六日 木曜 さる 雨、晴。

課業例の如し。午下早々、小石川病院に清水初子を問ふ。病、昨日よりよき方也。病人の家の事やらにて、入院も心ならずと察して、予ハ金貳百円を持って、見舞としてあたへたり。病人も泣き出して、悦々入候。外に見舞客も有て、早々帰る。此時、井深房州より帰りて、治子の病の容体委しく承りて、先々今の処よき方也、変さへ来らずは、取とめられると申されたり。此時、清水も来りて、井深氏より病状委く申される。上芝岩太事、今朝四時死去。

竹田氏、予、李子と。

十月二十七日 金曜 とり 晴。

研究稽古日。本日西ヶ原蚕糸学校え皇后陛下行啓、向ふ通り御通行ニ付、生徒一同奉迎申上る。石山たけさま、上芝のゆかりのもの、鎌(蒲)田え行てもらひ、香料金五円備(供)える。

十月二十八日 土曜 いぬ 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。

十月二十九日 日曜 む 雨。

朝、雨中ながら善光寺え参り、大宮尼公に御目にかゝりて種々おはなし申上、二階え御案内遊し戴て、眺望よろしく候。暫時にして帰。終日揮毫ものス。

十月三十日 月曜 ね 雨。
課業例の如し。

十月三十一日 火曜 うし 陰。

早起。散歩して善光寺御朝事参詣する。御血脈戴候。当校八時揃にて、九時式始る。校長教育勅語奉読、主事演舌ありて畢。今朝、房州いく子より文着。母も思ひの外早く回復にて大悦ひ、側えも付添出来るとて大くよろこびに候。

(十一月)

十一月一日 水曜 とら 雨。始而綿入を着る。

飯能え遠足会。四時起て五時出門。予、塾生全部引連、電車にて巢鴨乗替、池袋にて集合、武蔵野線に乗て行。此汽車始てにて、気色秋の色を呈し心地よし。此時より雨ふり出したれと仕方なし。飯能ニ無事着。員数六百十三人。駅の側に(一(六))倶楽部え生徒入れ。今一軒角の茶やニ設ありて入れは、予、李子、小能氏より迎ひの車来りて、是非と云、小能氏え行。主人五郎氏大ニ悦ひて、床飾より種々陳列もの心こめられて準備も出来たり。昼食を饗せられる。主人大ニ目算ありて、是非々々記念にとて、紙など用意万端と、のひてあり。豎もの二枚、額面一枚を揮毫する。此時、此所ニ住居する井上かく子と云もの来り、面会。明治五年頃の弟子にて、姉小路家ニ住居する時分の種々よく記憶して咄され、実に珍らしき事共也。此日、小能より芋畑を寄附する筈にて、芋堀(掘)を仕組たりしか、此雨にて、此芋をふかして一同え寄附せられたり。生徒等ハ雨中用捨なく天覧山え登りたり。種々大恐悦のよし。雨中ながらも先々無事着。

十一月二日 木曜 う 晴天。

休業。揮毫ものス。夜、宮城前美観奉祝門のイルミネションをみる。裝飾のよほと替りたるもの也。日比谷え行たれと、菊花壇また(未)出来ならずして、それより帰。来客、小能五郎氏、其娘と、昨日の御礼に来る。大悦也。

十一月三日 金曜 たつ 晴朗。

今日ハ天皇日和にて申分なし。皇太子殿下、御冊立式。李子、職員、生徒五組代表者引連、五時より二重橋え奉迎する。学校、八時集、九時式執行ス。職員、生徒着席。校長、始、君か代三唱、勅語奉読。皇太子殿下御事曆(歴)を申ス。今日の唱歌三唱して九時半過、大礼鉦(砲)と共に万歳三唱して、祝式全畢。生徒ニ蒸菓子を出す。午下、予、九段坂ニ行。花売の景況をみる。それより番町 (二字空白)子爵家に水薬師寺鏡台院を問

ふ。不在にて、後室大ゐに悦れ、新築落成之楼上にて、何くれと咄し合、種々もてなされたり。四時頃、鐘（鏡）一 台院帰られて、久々にて対面。此度ハ八十齡を以て、両陛下に拜謁を得られて、実に望外なる事、然し御健全、実に八十尼ともおもはれず、六十歳位にみえ候。夕景迄古しへの事共申て、とても咄しも尽すとて帰りぬ。

十一月四日 土曜 み 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下早々、小石川善光寺婦人会開会ニ付、出席ス。此日、会員五百人余と云。式後、一同写真撮影、後、余興ニ移る。晡時済、退散ス。

十一月五日 日曜 うま 晴。

朝、散歩して帰。水薬師寺の使の尼来りて、八十齡御寿餅一重下されたり。予よりも白紋羽二重一反を祝し候。

十一月六日 月曜 ひつじ

朝、散歩して帰。課業例の如し。

十一月七日 火曜 さる 晴。

研究生稽古する。

十一月八日 水曜 とり 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。午下二時より理事会を開く。原富太郎君、弘同道、橋本太吉君、増田義一君、角田君、大束君、泰も。学校地所買入之協義する。此辺之地代四十五円、其電車通りなそハ四十三円で近頃買たと云。してみれハ、五十円位てハ如何と、弘を以て申込させたれハ、泰云、五十五円にて一文もかけてハ先止めと云。弘も兄の強情に困却したり。止むなく五拾五円にて買得の約定済。夜に入て夕餐を出ス。夫より一同退散。夜月如鏡、深更又庭に出て月をみる。

十一月九日 木曜 いぬ 雨。

課業例の如し。昨日に引かへ、終日の雨。来客、曾我夫人、幸島菊子 娘縁段（談）治定のよし申来る。

竹田氏来る。

十一月十日 金曜 ゐ 雨。

研究稽古日。終日降通したり。午下、雨を冒して赤阪裏松家に行。千よ子さま、浅草婦人会副会長に頼みに行。然し、時（事）情のゆるさぬ処有之候とて、御断りに相成たり。暫時にして帰。

十一月十一日 土曜 ね 雨、午下晴。
本日より、五年生、晴天鶴、豎詠草二かゝる。

十一月十二日 日曜 うし 晴。

昼早々、予、代々木大炊御門駒女之病を問ふ。よほど快方ニ迎はれ、本日より看護婦も帰せと云。師前様御不在。石山吉子、同晨子さまニ御目にかゝる。正子も来合せたり。それより石山基陽さまの病を問ふ。本病ハ先々快方に迎はれたれと、鼻血治らず、動く事なりかたたく、困雜（一難）らしく見請る。房州重たけ（一威）より文にて、治子病氣ニ付ての礼状委しく申来りたり。
電報、もゝ子明朝八時半着。

十一月十三日 月曜 とら 晴。

課業例の如し。本日より朝九時始。李子、朝八時半東京駅着ニ付、雨宮ニ車迎に行。九時無事着。夜、散歩して帰。

訃音、中田清兵衛、十二日死去。中田氏香料五円、予、李子と。

十一月十四日 火曜 う 晴。

朝、天晴朗無類、修学旅行ニは尤妙。六時出門、李子、朝倉、五年塾生連て、大東、戸谷、石山随行。東京駅にて一同集会。七時半出発。予、散歩して帰。研究生稽古する。午下より空あしくなる。夕景より小雨降出したり。旅行先を思ふ。午下三時頃、神代鶴子より電話にて、此日從神戸来土産物、中野えも出してくれと頼まれる。晡時ニ付、預り置。ラジウム湯を浴す。
竹田氏、予、雨宮と。

十一月十五日 水曜 たつ 雨。

昨夜より降つゝきたり。課業畢る。川田氏へ行。夫より小石川病院に初子を見舞ふ。熱度も減して気分もよくて、見直したる模（様）に見請られる。暫時咄して帰。雨宮、芝協会へ行て、初子の病を尋ねてもらふ。吉あし（一良悪）何共仰せられす。先、こゝ一周（一週）間をみるへしと。雨中、使を中野え出ス。神代よりの土産をもちて。神戸より鶴子来る。久々にて、何くれと語り合て、此夜一泊。

十一月十六日 木曜 み 陰、雨。

課業例の如し。午下四時前より、予、靖子、子供等連て日比谷公園の菊を見る。懸崖の菊、尤妙。東京駅にて李子等始めを迎へて、四時半予程（一定）通、一同無事帰着。是にて退散。此時、雨ふり出して、予等、子供五人と自動車にて帰。鶴子、靖子と同道、中野へ行

て(以下、記述ナシ)

十一月十七日 金曜 うま 雨。

研究生、朝の稽古済。予、正午より浅草婦人会ニ参詣ス。雨中ながら大勢なる参詣人にて困(混)雑する。二時。

十一月十八日 土曜 ひつじ 雨、午下陰。

朝の課業済。一時より三条家ニ行。正一位実美公、昨年十一月十一日、別格官幣社梨木神社え合祀之義被仰出候ニ付、本日自邸ニテ靈前祭執行ニ付、参拝ス。閑院宮妃殿下を始、御親戚も大せい参拝者にて、食堂ひらけ、御洋餐を賜はる。已而帰。帰途、浦艶子を尋ねて帰。鶴子、正子と来りて一宿ス。

十一月十九日 日曜 さる 朝晴、后下雨。

鶴子、正子と同じく三越え行。麻布神代え行て、雨に逢て帰。

十一月二十日 月曜 とり 晴。

朝、散歩して帰。課業例の如し。鶴子、山根氏え行。此夜、七時汽車にて帰神。六時より、予、李子と靖子も東京駅え行。泰、弘、寿子も来る。山根あや子、神代麻布も来る。七時発にて鶴子帰。

十一月二十一日 火曜 いぬ 晴。

朝より研究生稽古する。揮毫ものス。来客、高松君子、渡辺その。清水連郎、初子の病氣ニ付、本日院長より、とても見込なしとセンコク(宣告)せられて、落胆限りなし。

竹田氏、予、外三三人。

十一月二十二日 水曜 む 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。午早々、河田氏え行、夫より小石川病院に初子を見舞ふ。もはや見込なきよしなから、元氣もあり、咄しもよくいたして、種々の人間の成行など、何くれと申聞し、すへてか因縁と明ら(諦)めて、万事悦んで養生するかよろしと申きかせ、一時間計にて帰る。房州いく子え、一度見舞に来るやう申やり候。此夜、酒匂藤井氏より、柚味噌、鶏肉味噌二曲、外に扇子二本着。来客、福岡易之助 三宅花圃紹介、李子会见。

相川より林檎一箱。川越加島周吉 不分明、甘藷一俵。同、鎌倉小児保育園より。

十一月二十三日 木曜 ね 晴。

新嘗祭。朝、閑院宮様より、御電話にて、黒田茂子様、今朝三時廿分に御男子御産、御二

方とも頗る御建（健）全のよし、御しらせに相成、嬉しさ限りなく候。来客、鳥尾千世子、弘も来る。夕方より大沢亀子迎ひに來りて、予、李子と不忍の笑福亭にて晚餐を饗せらる。大沢氏も來りて、座敷天ふらと云。右揚つゝ側てたうへ（食べ）る。実においしく覚候。八時過、帰途上野散歩して帰。此夕、清水より電話にて、初子病状、よほと悪しく由申来る。早々病院へと存候。然し、電話にて聞合せたれハ、今と申事もなきよし。連郎も帰宅いたして居り、又明日にと申伝えたり。朝武たけ子結婚祝もの、幸島睦子えも祝もの、もたせやり候。黒田家より御土産。御男子長久様卜御命名在らせられるよし、御吹聴あり。

十一月二十四日 金曜 うし 晴。
研究生稽古する。

十一月二十五日 土曜 とら 晴。
朝、散歩して帰。課業例の如し。来客、浦月子、土井田鶴子。予、黒田侯に行、御出生の若君を見上る。実に御たくましき御健全なる御子にて、九百九十目の御体量也。御祝酒、御料理等戴て帰。
竹田、予、李子と雨宮と。

十一月二十六日 日曜 う 朝雨、後陰。
午下早々、車にて、予、代々木久米氏へ行。菊の品評会にて、能楽もあり。古市君の放下僧卜狂言甘コウ、六郎の葵上、よく出来たり。座敷にて洋食。来客も大せいにて盛会なり。夜に入て、自働車にて古市君と帰。来客、土井田鶴子、叔父なる人と。今般寄宿にて世話になりたき故也。

十一月二十七日 月曜 たつ 晴。大ぬにあつし。地震の用心する。
朝、散歩して帰。課業例の如し。午下、浅草本願寺御講に参詣する。説教三座、聴聞して帰。来客、酒井喜美子様御出也、夕景迄。

十一月二十八日 火曜 み 陰。
朝、散歩して帰。研究生稽古する。午下、相川来る。温公木にて作りし脇そく（息）、真香と云北海道の盆栽をもらふ。よほと幹など面白く、五百年位のものト云。来客、遠山愛子、久々にて来る。女子出産して御礼に來る。藤井瑞枝、其外え、十一通書をよす。朝、李子、小石川病院に初子問ふ。段々と死にヒン（瀕）したる様子也。

十一月二十九日 水曜 うま 雨。
課業例の如し。正午前より、河田氏へ行て帰。来客、秦、小林鍾吉、相川 盆栽の鉢を所々をさ

かして、漸求て来る。午下五時、福岡易之助氏之招に応して、紅葉館へ出向るつもりにて、車
まで来りたれと、リウマチいたみ出して、無拠電話にて断る。
神戸鶴子より書至。

十一月三十日 木曜 ひつじ 雨。
課業例の如し。

(十二月)

十二月一日 金曜 さる 晴。

研究生稽古する、昼迄。午下一時出門。永田町村井氏へ行、備(一供)物する。夫より海
事協会へ行。防長クラブ席也。余興、貞水講演二席、書画。余も、尺八巾豎物二枚席画ス。
食事済て晡時帰。朝、初氷、初雪。屋根白く積みたり。

十二月二日 土曜 とり 雨。

課業例の如し。午下六時、予、李子と同しく、築地精養軒二行。鈴木富治、幸島睦子の結
婚披露会。余興、細川風谷二席、園(一円)右一席。食事はしまりて、食後、長唄吉(一芳)
村連、鶴亀、勸進帳、面白く感したり。九時帰。

十二月三日 日曜 いぬ 雨。

村井宇野子の一周忌。鶴見え参詣の約束したれと、雨にて断る。観世え見能に行。予、田
鶴子、雨宮も。予、帰りに小石川病院二行。初子ハ今新宅え移りたりと聞て、其新宅へ行。
寐(寝)台にて漸床に移したり。此道すからも危きよしなから、意識ハやはりたしか也。
暫時にして帰る。斎藤仁子さま御出にて、夜分種々咄しに長したり。

十二月四日 月曜 む 小雨、曇。終日雨。

課業例の如し。来客、高橋春江、斎藤仁子、芝え同行之筈、先生病氣ニ付、予ハ止る。中
野え林檎、梨子、もたせやる。閑院宮様より、小田原御裁懇(懇)の美甘(蜜柑)、沢
山いたゞく。斎藤仁子、芝え行て種々聞て参り、もゞ子も行て、深更迄咄したり。

十二月五日 火曜 ね 晴、大極上々。

研究生稽古する。午前十一時、清水より電話にて、初子の命も今日にせまりて、今一度伯
母さまニ逢ひ度と申事にて、直ニ来てくれと云。早々車を命して行。初子、眼を見開きて、
御礼ハ申度も口かきけすと申。伯母さまニ御目にかゝれて嬉しきと申。静に死を待のみ也。
一時帰。今晚、八時か九時頃か臨終と申事也。

十二月六日 水曜 うし 晴。

課業例の如し。正午より河田氏え行て帰。来客、斎藤仁子、夜はなし、十一時迄。李子、清水え行。初子未だ落付居り候。

十二月七日 木曜 とら 雨、後晴。

姉小路公義卿十三回忌二付、十時より光円寺ニ参詣する。読経ありて、十二時過、姉小路え出向ル。来会者、万里伯、関氏、裏松千代子、河部（一辺）男、石山吉子、予、李子、玉枝、松木薫子。鄭重なる饗応にて、始而主人伯の理想の仏事にて、故公義様も冥中御悦の事と存候。此御法事に逢て、はしめて心地よし。三時過帰。竹田氏、一先断る。

十二月八日 金曜 う 雨。

研究稽古日、昼迄。

十二月九日 土曜 たつ 雨。月清く、はしめて晴たり。

課業例の如し。午下二時頃、雨宮、清水え遣したるに、例の通りなるに、清水、五時過、初子容体あし、只今と云電話にて、予、李子と車にてはせ付たれと、五時五分全死去。臨終も静に往生をとけたりと。残念限りなし。予ハ一先帰。

十二月十日 日曜 み 雨。

課業例の如し。李ハ清水え行。香料、外御すもし二重を持参する。香料拾円也。

十二月十一日 月曜 うま 雨、后陰。

課業例の如し。朝、散歩して帰。五年二ノ組、画の試筆にかゝる。此段、失敬千万なる事致して、大ぬにいかる。松竹梅三幅対の函書する。相川に渡ス。観音、游鯉、二幅函書する。法帖二冊、揮毫する。夕景より、予、雨宮と清水え行。それより入棺。此世の暇乞する。九時頃帰。うどん、そばなど持参する。

十二月十二日 火曜 ひつじ 晴。朝霧ふかし。橋岡来る。

研究稽古する。清水初子葬儀二付、李子代理する。此夜、連郎御礼に来る。来客、柳内侍より森永琴。

十二月十三日 水曜 さる 晴。上芝岩太、四十九日。

正午より河田氏え行て、閑院宮様え参る。御息所拝謁、暫時御咄申上て、村井氏を問ふ。不在にて不逢して帰。

十二月十四日 木曜 とり 晴。

本日より試験執行。板垣夫人の代理にて、河野慈舟、婦人飛行乗二付。善光寺住職。

十二月十五日 金曜 いぬ 晴。

研究稽古日、本日を以て納会とス。

花港、茂木恒子え。

花鮮、鶴見常子え。

清水初子、初七日法事二付、雨宮代理ニ遣す。神代鶴子より清水初子え香料三円取替る。

(十二月十六日、記載ナシ)

十二月十七日 日曜 ね 晴。

大山公の国葬式当日。午下二時頃、一寸村雨したり。予、正午より芝青松寺薫風会に参詣する。三時頃帰。

十二月十八日 月曜 うし 晴。

午後早々、予、李子と青山煉(練)兵場へ行。板垣夫人の催主にて米国スチンソンの飛行振をみる。此日ハ霧深くして上下とも見えぬよし。二度乗て空少しく晴て、三度目にハ実に工(巧)妙なる中(宙)かへり、いく度もして人を驚かしたり。此休憩中、スチンソント予等会員と撮影したり。四時、畢而帰。

手弱女の業ともみえず雲の上高く飛行いく返りして

十二月十九日 火曜 とら 晴。

研究生の稽古納する。学校にて惣生徒に大山公の功績(績)を申伝えたり。主事演舌。来客、正子、泰、大島大臣夫人。生徒生(ママ)試験、全畢。

十二月二十日 水曜 う

正午早々、河田氏へ行。此日納会也。二時、済て帰。所々え歳暮物品配らせる。

十二月二十一日 木曜 たつ 晴。

朝より配り物のさし図する。午下三時より帝劇ニ於テ、毛利安子、鍋島栄子夫人之スチンソン観(飲)迎会ニ行。市川左団治一派之劇にて、碁盤忠信吉野山の雪、朝貌日記、修禅寺物語、三ツ巴雪夜はなし等にて、久々左団治の芸に感服いたしたり。十一時帰。

十二月二十二日 金曜 み 晴。

十二月二十三日 土曜 うま 晴。

生徒試験全畢。式場ニ集会、脩業式。先校長、送別に對しての咄しあり。次ニ学監齋藤氏、李子との送別の辞ありて、めて（目出）度式相濟。教職員一同え午餐、鰻飯を出す。琴曲ゆるしを授ク。茶道ゆるしを授く。

十二月二十四日 日曜 ひつじ 晴。

来客、宮原六之介氏。午下、三越え買物に行て帰。

十二月二十五日 月曜 さる 晴。

日々歳暮の贈答之品物分配ニいそかし。来客、岡村贇女、廿七日川村氏之男と結婚ニ付、御暇乞に来る。

十二月二十六日 火曜 とり 晴。

朝より橋岡氏え行て帰。夜も小包物、地方え出ス。

十二月二十七日 水曜 いぬ 晴。

終日、歳暮之配り物にいそかし。来客、橋岡氏、画を取に。三日月清し。

十二月二十八日 木曜 ゐ 晴。

終日にして歳暮配り物大略すむ、五拾三軒え。来客、秋月夫人、御礼に來りて金五拾円御寄附相成。

十二月二十九日 金曜 ね 晴。

大掃除する。

十二月三十日 土曜 うし 晴。

暮の祝義事ニいそかし。新年状、百五拾軒出ス。夜、清水連郎来る。遠山雪咏進す。

十二月三十一日 日曜 とら 晴。

朝より洋館其外かざり付、家内惣掃除も先々相濟。本年も元朝より身体大健全、薬其外医師にも一度もかゝらず、心身共に大快活、何も申分なく、収入も余（予）想外にて、有かたし共有かたし。先今年もめて（目出）度送たりたり。あなかしこ。

つくは山
高砂の 峰のしら雪
大君にさゝけんと思ふ はつ雪の 山のけしきを 箱庭にして

○さゝけんとおもふ蓬か島山の雪のけしきを箱庭にして

○遥かなるふしのしら雪月花のやまところの種にそ有けれ

心のみ深山の雪に分入て見んとせし間に夜ハ明にけり

○心にもかゝるものとかしら雪の

「不二のけしきハけさの初ゆめ

し不二みて嬉しけさの初ゆめ

及ひなき雪にはあれとつみあけて遠山のけしきとなしたきものを

空遠く及はぬ雪もつみあけて山のけしきとなさまほしけれ

○嬉しさハなにゝたとへんふしのねの遠きすかたを初夢にみて

○沖遠く宝の船にのりなから見しは夢かやふしのしら雪

真心の数ハつもれとしら雪の遠き山にはかゝらさりけり

つくくと思へと遠き筑波山山には雪のかゝらぬものか

国の富いやか上にも高かれと雪降りうつむふしの遠山

遠山の雪白かねと化したらば独乙こいつも有へきものか

花蹊

(挿入紙1)

天杯を賜りたる有かたさに

○たまものゝ玉の杯底清くうつるや法のみかけなるらむ

右は、仏法者にてみのりの有かたき事を歌に入れてとてたのまれたれば、よろし

く歌になし下され度願上候。

また

み仏のみかけなるらむ賜りし玉のさかつきいたゞける身は

みめくみの玉のさかつきいたゞきて法のみかけをまつおもふかな

かやうにてはいかゞ侍らん。昨日家にかへらさりしたために、みかへしのおくれた
るをゆるしたまひてよ。

周魚

(挿入紙2表)

文もて御礼申上たく候。愈御揃

御きけんよく御めて度存上候。

さて昨日は、かねて御申越下され候私の

為の喜寿の御祝ひ遊はしいたゞき、

殊に大勢を御迎へ下され、有かたく候。

さて御新築の宏大なる、善尽されたる、御主人様の

御趣味を発暉して、嗚呼と計

かんし入候。其上御床には御名幅御飾付等、御ひと間々々に

数寄をこらして、いつれもゞ感歎の

外無之候。御食事の御献立も

御心尽しの物のみ、其調和、其あじも

格別にて、十余分に頂戴いたし、御余興も、

名人たちの清元舞躍にも、こゝろ

清々しう覚え候。御主人様の御配慮、

前々よりいか計ゞの御心くたかれ候

御事と、くれゞも御察し申上候。

かゝる御鄭重とも、おもはぬ御饗応にて、

実にゞいたみゞ入候。私はしめ一同相客、いかなる仕合

ものと、くりかへしゞ存上候。帰路車中

にても其御心のいたらぬくまなき御事

賞しつゞ、無事につき、一同無事

帰宅いたし候。この御遊ハとても筆には

つくしかたく、またお目もしの節と、

たゞゞ御礼まで申上候。

一日の快樂、十年の命ものはへ候。

はた後席に田舎やにて、御薄も、御手前も
御庭の水きわたちて、うつくしく清らかにて
御薄御手前もうつくしく清らかに
心置なくいたゞきて（以下、記述ナシ）

*発暉（發揮）　　*御鄭重とも（御鄭重ども）　　*のはへ（延へ）

（挿入紙2裏）

私ハ多年女子教育上に従事して経験もあり。

又教育思想をなにかはな（話）せと仰せられ升か、
別にはと云面白き説も御座りませんか、然し
教育するには、大体日本国民ハその大

根本的なる神聖なる日本魄の確立して、

天御中主神尊、皇祖皇宗を貴ひ、日本の難有き事を

生徒に注入して、それから礼樂を本として、あらゆる学事を

修養させたならば、たとひ世界に伴随して

行事か出来る。今の固（個）人主義（義）はいかゝのものか。

私等ハやはり家族制度、則国家主義（義）

を賛成致します。学校卒業して、一度

嫁して主婦と成而ハ、旧姑に仕へ、夫に

仕へて、昔も今になすと云事も嫁次第にて、

一家団らん（樂）する事ハ相互に真実を以て

おもひやり、一ツには円満なる家庭ハ造られる

と思ふ。人間ハ何の為に此世に生れたるや。

家のため、国家のため、育児を、法を

教育してケン（献）心的に働くのです。又不幸

にして夫に先たゞれたる時ハ、一家の経済

も、よくセイ利（整理）して行覚悟なかるへからず。

学校時代より、何か時（自）分の好む処、学

芸にて、一家の経済も立て行くと云、此覚悟

を以（持）て居らねハなりません。夫にしても身体の

建（健）全をはかりて、常に何事をなすにも

心よく愉快につとめ、世を楽しくすると云、

是て行ばとおもふ。教育はゆるかせには

ならぬ。体育もみな致して居るか、小学よりの机によると、

習クワン（慣）にて、近眼の如く方（肩）を机にあてゝ物をかく、

此習くわん（慣）を限（改）良する事むつかし。

（挿入紙3）

証

一 金五百円也

右者謝儀として御寄贈相成、正ニ受領候也。

大正五年十二月廿二日

跡見花蹊 印

財団
法人 跡見女学校御中

（挿入紙4）

至誠ヲ以テ一生ヲ貫キ

克ク邦ニ勤メ克ク家ニ儉ニシ

協力和合シテ万全ヲ期スベシ

至誠貫一生

勤勞当百事

勤儉当百事

克勤邦儉家

協和期万全

（挿入紙5）

（写真版入る）